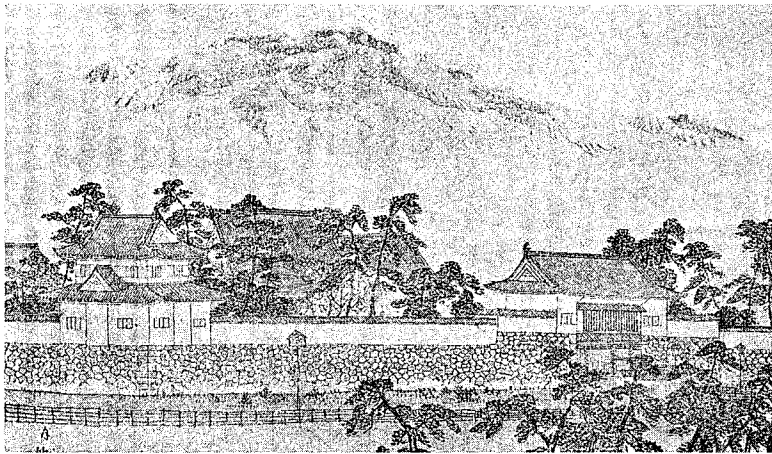


小田原史談

第36号
小田原史談会
小田原市幸一館
所 小田原市文化
行 小田原市
小郷 土

印刷の御用は
清水印刷
小田原市幸一ノ一七
電話小田原三四七七番



京都一条離宮図

(月洲画伯筆)

日本の「みやこ」

京都還都論

高崎経済大学教授 三 濑 信 吾

青丹よし奈良の都は咲く花の
匂うが如く今さかりなり

たたなはる青垣山にかこまれて、平城宮、奈良の都には、美しい朱と白とに彩られた建物が並び(青は白の意か)奈良朝の高度の文化の華が咲き競い、精神的緊張と、現実生活の平和とが快く調和していたであろう。

今、毎年内外の観光客や、各学校の修学旅行団が踵を接して南都を訪れる。岩草山の緑、群れ遊ぶ鹿、猿沢池に映る五重塔、東大寺の大仏や大仏殿の雄大さ、法隆寺薬師寺、唐招提寺等に、さては一刀彫に赤膚焼と、一々が目を見はるばかりで、日本人も外国人も、一言を加える余裕すらない。これ程に豊かな落着きを保持し、而してこれ程にすぎない文化の都・政治の都。京の平安時代はこれに及ばず、奈良朝以前の史蹟は、これ程に都の佛を残してはいない。僅かに数個の遺跡の中に、その奥深さ、偉大さを窺い知るのみ。

しかし、奈良県即ち大和の地方には、古都の跡は多い。奈良盆地合体を一日も速やかに史蹟名勝地として指定し、国立公園として保存しなければならぬと思う。ところで、奈良を訪れても、飛鳥を訪ねても、その歴史的遺跡に驚歎するのみに止ってはまだまだ足りない。大事なことは何がこの奥深く無限に偉大なる文化を生み出したか、何がその源泉であつたかということである。

それは、外国の多くの文化の基礎として論じられる権力や利益を土台とし、或は対立抗争を事とする所からは到底生れ得るべくも無い。遙かにそれらの次元を立ち超えた高い品性、見識の然らしむるものである。

然らば、それらの高い品性や見識を生み育てたものは何か。これを備へて生き栄えた都の中心は何であつたか。「みやこ」は、その名の如く、宮のある所である。

京都の平安京の皇居、又、奈良の平城宮址、更に遡って、藤原宮址、磯城瑞垣宮址(しきのみづがきのみやあと)飛鳥の清見原宮址等、少なくとも今の皇居たる江戸城を除き、各皇居即ち「宮」の址を拝観すると、深も石垣も無く、皇祖天照大御神をはじめ天神地祇を中心として、市民、国民と同一平面上に、僅か土塀一枚を以て皇居が営まれ、神人合一、君民一体、心からの信愛を以て固く結ばれている。ヨーロッパから伝わって来た民主主義というものの理想像は、正に日本の都に於て、二千年来の歴史を以て重視されて来たのである。武家七百年の政治の間に於てさへも、敢て禁門を侵す者は無かつた。

幕府の権勢の前に、皇室が極度に貧窮に陥り給い、権力に於ても兵力に於ても無力に比すべき時代でさえ、皇居を破り、皇室を倒すことは企て得なかつた。電灯のない時代に、三条の橋のたもとから、御所の灯火の見えるのを歎き、遙かに皇居を伏し拝んだ高山彦九郎の像が数年前、三条の橋畔に建立された。

君民一体、古今一徳、上下一心、人たる道の真隨を、心のまことに深く洞察し神ながらの大道として、言はず語らずのうちに、かえって融通自在、以心伝心、共に愛共に喜び、天地と共に弥栄えて窮り無きを確信して数千年の歴史を歩いて来た偉大な民族、最も古き歴史に生き、而も来るべき最も新しい時代の担手たる素質を有する民族。その源泉が即ち、万世一系の皇位の本質にある。

その皇位の本質即ち天皇の大御心をそのまま表現するもの、それが日本の「みやこ」である。

今、振り返って、江戸城は、これ以上、皇居として残置すべきではない。明治維新に於て、数百年の幕政に終止符を打つ為には歴史的古都から一時、江戸城に乗込まれることも必要であつたろう。公武合体の意味もあつたであらう。しかし、今は、もはやそれを必要としない。これ以上、濠と石垣に囲まれ、偉容を誇る江戸城に、皇居はあるべきではない。

又東京には、歴史的城下町としての品位すら既に失われ、まして、商工業の煩雑、消費的な大欲楽と掛引の渦の中に、皇居は没し去らんとしている。塵埃と騒音にビッシリと取囲まれた皇居。それでも一天万乗の大君には、憲法に言う「居住及び移転の自由」はあらせられぬ。

首都圏計画の如きは、皇居を置き去りにするつもりなのだろうか。怖いことである。

今、新しい「みやこづくり」が不可能だとすれば、せめて、皇居を京都皇宮遷御願つて、京阪神和を一九とした首都圏計画を練るべきときではなからうか。

首都には、国の最高の品性と、静けさと而して民族の中樞を成す歴史的な精神伝統の息吹きとが必要不可欠の要件であると思う。(元)

附記・先生は歴史の造詣深く、国民の思想善導に尽力、私は当市における団体のご講演を聴きその卓越せる言説に敬服せる一人である。本稿は私の願を容れ、特に我が史談会のために筆を執つて下さったものでここに感謝の意を表する。

(斐田)

小田原北条氏と鯉節

内田 武雄

天文六年の夏のことだ。沖にたくさんの釣舟が出て。小田原城主北条氏綱は、いと聞き、その勇壮な釣

の情景を眺めながら酒宴を開こうと思つてた。そこで小舟を仕立てて沖に乗り出した。とつぜん、その小舟の中に一尾の鯉が、せいよくとびこんできた。興を覚えた氏綱はこれは勝負に勝つ魚だと賞讃し、さっそく料理して宴席の肴にした。二日後、上杉五郎相定が武蔵の国へ向かつたとの注進を受けた氏綱は、ただちに軍を率いて進發、大いに相定を破つて武蔵の国を手に入れた。それから氏綱は戦えば必ず勝つた。そこで氏綱は鯉を益々愛好し、小田原の兵たちが出陣する折には、引出物として必ず鯉節を与えた。鯉節は勝男武士と言われて、出陣の時にはなくてはならぬ物の一つにかぞえられた。又戦国時代には軍用食として利用され、太田資正は『食事は大食悪し、餅四つ五つ持参するかよい鯉節も持参あるべし此の外の物は無用なり』と腰兵糧の秘訣を述べている。

今でも結納品の中に勝男武士として(鯉節)をもちいているのも北条時代の名残りだと言われている。

城山陥落余計

薩摩浪士有村治左衛門が水戸浪士と桜田門外に伊井大老を襲撃したときの輝の話を会報(七月第十三号)に書いたところ、これを見た郷里の一人から丁丑夜城山陥落時官軍に在った故田中光頭伯の談話を寄せてきた。興味ある記事であるのでここに転載する。(M)

【田中光頭氏談】(前略) 当時私は軍の会計監督をしていたが、可愛岳を突破した時の騒ぎは大変なものであった。宮崎の細島から船を八方に出して大西郷の行方を捜索させる。中には再び熊本城突撃を試みるつもりだろ、官軍のあわて方は一通りでなかった。

その内に大西郷をはじめ敵の主力は鹿兒島に入ったことが判つたので、それを城山に押し込めて、蟻の這い出る隙もないほど幾重にも包囲した。敵にはそれほど籠城の用意のないことは判つていたので、官軍はひしひしと取り巻いて、ゆるゆる攻め落すつもりであった。

遂に二十四日には官軍は総攻撃を開始した。大西郷をはじめ、主だった敵の首領は、いづれも岩崎谷の奥の方に石垣の中段のようなところに弾丸を避けていた。ので、官軍は上から石や鉄砲を雨のように注ぎかけた。敵も遂に力尽きたのであらう。一同は皆自刃して果てたが、大西郷はこの洞窟から出るとき、流弾に腰のあたりをやられたものらしく歩行の自由を失なつておられたらしかつた。

半数は燃えるようなあかね染のものであつた。たまた不思議に思つたのはその草鞋で、これはすべてつづれもしくは麻で編んだ丈夫なもので、まだ十分脱出し得るしかりしたもの履いていた。

洞窟の前には古びた碁盤が一つ置いてあつたが、その一角には鮮かな刀痕が残つていた。(後略)

秋の史蹟めぐり

九月二十三日午前九時小田原駅前集合、来会者約百名貸切りバスに乗車、本会理事加藤誠夫氏の東道にて足柄上郡大井町付近の古蹟巡りを挙行、加藤氏の懇切丁寧な説明を聴き極めて有意義に終了、夕刻解散した。

柘本展開催

郷土文化館と史談会では市民文化祭に参加し、小田原近郷の文学碑・記念碑・史跡碑等の柘本を館内に集め一般の展覧に供するので、多数お誘いご来場を希望している。期間は十月二十五日より十一月三日まで

親鸞上人と箱根

佐渡の布教につとめること五年、赦免されて帰洛の途についた親鸞上人は信濃路の巡錫を経て江戸から東海道をさして道を急いだ。

小田原を過ぎて湯本から箱根の嶮にさしかかったときは、既に日は没していた月あかりをたよりに疲れた足を引ぎずりながら、一行五人はあえぎあえぎ登った笈の平(おいのいら)にたどり着いた頃は夜もほのぼのと明けはなれてきた。

ようやく急坂を登りつめた上人はほっと吐息きをもたして路傍の石に腰をおろした。

わかい弟子だちも疲れをやすめて屈んだ。あたりはしっとり露に濡れ、草むらからこおろぎや鈴虫が夜を惜しむかのように鳴きほそってゆく。

上人はじっと瞑目している。なにか思いなやむことがあるらしい。

やがて傍らの性真坊を顧みて言葉をかけた。

「……われらがうち連れて上洛しては、東国の教化は心もとなない。どうかお前

はあとに残って教化につくしてほしい。親鸞の心を汲んで関東にたち戻り、老若男女を導きひたすら安樂浄土、往來せしめるよう、これが老衲の切なる願ひである」

性真坊は、じっと師の言葉を聞いていたが、あまりにつれない突然の申しわたしであると思惑の眉をひそめた。今日まで苦難の道を共にした師と別れることがどんなにか辛いことか、一人は拒げんだが、師の切なるのぞみに抗しかねて、ついに承諾した。

上人は深く喜びおぼれ、かねて北国流罪の祈念として刻んだ尊像を取り出し、我が身を離さぬこの像をそなたにつかわすによって、我が身に代って御給仕申せよと笈とともに与えたのであった。

御房の喜びは一通りではなく、かかる尊とき御像があるからはご加護の力によって疑いなく安泰教化をなし得んと固く決心した。

一人となった性真房は上人と同僚とに訣別の言葉を

かわして、今來し道を常陸の国へと志して坂を下った上人は涙にくもる瞳を向けて、去り行く弟子をいつまでも見送った。

「仏の道に仕えるには惜しい弟子とも別れねばならぬ」

一行は涙ながらに坂を登って行った。

笈の平はこうした親鸞上人と弟子との離別の旧蹟地である。笈の平と呼ばれるのもこれからである。

この坂は、秀吉が小田原攻めの際、大軍を率いて着陣のとき、小田原城はまだ見えぬかとたずねたので、見えぬのを答えたのがもとで、それ以来城不見坂ともいうようになった。

親鸞上人はそれから箱根権現に参拝し、報賽のため自作像を刻んで二十六時中奉仕の身代りとされた話ば有名である。

天平勝宝五年(七五三年)に唐の鑑真和尚が来朝の際に天皇に奉獻した天竺伝来の十一面観音像を奉安する名利として、又弓削氏によって千代台に安置せられ、のちに飯泉の現地に移建され、阪東三十三観音の第五番札所として、また小田原城の鬼門にあたるところから、城鎮護の道場として歴代城主の帰依を受け、勝福寺の勅号さへ賜った靈場として、往昔は諸国より巡礼者陸續として跡を絶たぬ繁栄をきわめたことは皆人の知るところである。

曾我兄弟が本懐達成祈願のため当方の仁王尊に日参したことが、二宮尊徳が少年のおり本堂参詣中一旅僧より観音経の功德を教えられたこと、小田原勸進相撲が境内において舉行され、雷電為右衛門が孝子仇討ちの相撲のことなど世に伝っている。

この名利も回録二百年の星霜を経て腐朽の度甚しく仁王門は先年修築されて面目を一新したも、金堂はわずかに側材に支えられて倒壊を免かれ、補修改築の必要は焦眉の急に迫まら

る現状を見て、下府中々里に居住する斎藤喜代治氏(史談会員・山形県鶴岡市出身)は現状を觀るにしのびずとして奮起し、一千年来の法灯を維持し、かつ果文化財保護を完了せんがために復興保護の悲願をたて勝福寺の寄進募集とは別途に、大方の篤志に訴え、その淨財により金堂復興に寄与したいと願ひし、三万名一名百円寄進達成を目標として本年二月より募集に着手し、既に数百名の賛同を見るに至ったが、氏は広く市民にも呼びかけ目的達成のために目下健闘をつづけておられる。

文苑

吾子の額に汗滲みきぬ秋陽の中に
九月二十三日小田原史談会
秋の史跡めぐりに伍して
清水専吉郎 潜水専吉郎
はげましの市長の声にパス
二台 小雨の中を史談には
ずむ
頼朝にちなみあるて宝篋
塔 つくり酒屋の裏山にさ
びし
幾千年前に住みぬる人し
の 大井の山の石なみの跡
時頼と常世をしるす最明寺
ここに謡はむ鉢の木を曲
伝説の蘇生のご鈴にふる
余韻瀧々行き戻るパス
旧家なる金子の間宮古文書
の保存尊としいそぐ帰り路
道灌の夢が石ある天神社
道すがら拾う家子との石
へだたれる昔の人を友とし
て わざのあととふ松の下
かけ

同じく 広沢十五夜
土砂降りの雨もいとはず集
い来る史蹟めぐりに熱意の
人々
亡き父母の冥福祈りし丸石
の風外窟にいまもそのまま
代々の系図が伝う名家なれ
数ある古文書に眼もうばわ
れぬ
佐殿になぞらへ供養の宝塔
も源氏にゆかりありし里大
史蹟めぐりけふの一日を意
義深く和氣あいあいと帰る
人々
お断り・史蹟めぐりの両
氏の歌中紙面の都合により
一部省略したることを諒せ
られたし

真鶴海岸にて
浅井久美子
熱砂より這い來し蟹が岩の
間のくぼみに入りぬ潮引き
し刻(とき)

釣魚大会
浜田 如月
万山鮮緑断塵縁。
魚躍海流仙石辺。
把筆代筆垂釣興。
群賢齊少似芳奸。

幼稚園にて
不得手なる遊戯つづげし

飯泉観音
金堂改築
斎藤氏の悲願
通称飯泉観音と呼ばれる飯泉山勝福寺は、今より一千数百年の昔、孝謙天皇の

編集後記

▼故田中伯の談話中、戦死者は何れも新しい袴を履いていたとあるが、汚れた袴は武士の恥としたもので、いよいよ死を覚悟しかねて用意の袴と草鞋を使用したものであろう。どうしてこれが手に入ったかの疑問があるが、当時間道から夜分妻子らが密に食物などを運んで入れた形跡があり、これもその一つであると思う▼また、あかね染めの袴を履いていたのは当時薩藩武士間の流行でこの風習は私の幼年時代まで残っていた▼本年の市の文化祭は多彩で文化館においても史談会と協同で拓本展を開くことになった。拓本は一寸見ればえがせぬが、一々吟味すると意義深く歴史上の参考資料としても貴重な存在である。当路者が一々拓本をとって集めた労力も少なくなかったろう。一般の観覧は元より可成多くの識者の観覧に供して有意義にこの展覧会を終了したいものである

(M)

<p>御料理仕出し 御弁当</p> <p>東華軒</p> <p>代表取締役 飯沼相三郎</p> <p>小田原駅前 TEL (0465) 5061~2</p>	<p>楽しい生活</p> <p>明るい読書</p> <p>八小堂</p> <p>小田原駅前 TEL5388~9</p>	<p>船</p> <p>志澤</p> <p>TEL3131</p>	<p>小田原駅前</p> <p>あさひ</p> <p>食堂</p>
---	--	---	--

<p>あなたの暮しのムードをつくる 婦人・子供の店</p> <p>小田原</p> <p>メリヤス</p> <p>小田原市錦通り 3837 TEL (0465) 3864</p>	<p>建築金物 家庭金物</p> <p>株式会社 星崎仲吉商店</p> <p>小田原市多古412番地 電話 2718</p>	<p>酒・ビール・食料品</p> <p>今井重雄商店</p> <p>小田原市幸三 電話(0465)2234~5</p>	<p>写真</p> <p>イガラシ</p> <p>小田原市幸3 TEL2534番</p>
---	---	--	---

<p>きそば</p> <p>寿庵</p> <p>小田原駅前 電話二八六二番</p>	<p>あなたの洋品店</p> <p>はふや</p> <p>小田原幸町 TEL 2307</p>	<p>家庭電化で明るい暮らしを</p> <p>(有) 岡田電器</p> <p>小田原市十字1の22 電話(0465)2613, 5308</p>	<p>有限会社 あめあるよ</p> <p>代表取締役 川口 浩</p> <p>小田原市曾我谷津616番地 電話 (0465)(47)3808番</p>
---	--	---	--

<p>印刷の御用命は</p> <p>有限会社 鶴井印刷所</p> <p>小田原市緑三ノ二七 電話(0465)4211七</p>	<p>料理割烹</p> <p>だるま</p> <p>小田原市幸1~10 TEL(0465)4128</p>	<p>セトモノの御用は (陶磁器・陶管・植木鉢)</p> <p>有限会社 大川商店</p> <p>TEL8513・3055</p>	<p>浄化槽の清掃修理</p> <p>小田原市緑1の47 小田原衛生株式会社</p> <p>電話(0465)5861・2468番 取締役社長 鈴木 浩</p>
--	--	--	--

<p>電気工事一式・設計・請負 販売修理</p> <p>兵藤電気商会</p> <p>小田原市下曾我駅前 電話国府津(47)3578番</p>	<p>建築用材一式 (建築御用命一切承ります)</p> <p>稲葉材木店</p> <p>小田原市十字1~23 電(0465)5621 新玉3~751 電(0465)6884</p>	<p>小田原報徳 自動車株式会社 太陽自動車 株式会社</p> <p>代表者 曾我律之助</p>	<p>伊豆箱根鉄道株式会社 大雄山線 運営事務所</p>
---	---	--	---